石崇楽府〈吟歎三曲〉について

——〈史〉的性格とその背景

狩野　雄

はじめに

贅沢ばなしを集めた『世説新語』汰侈篇に六度その名前が見えていることから、石崇（字は季倫、二四九—三〇〇）は度を過ごして奢侈な生活を送った人物として知られている。実際、『晋書』（巻三三）の本伝をはじめ、その他の伝記も、財を成し贅を尽くした人士としての石崇の姿を後世の我々に伝えている。また、その最期が愛妾緑珠の引き渡しを拒んだことを直接の契機とするのも、石崇にまつわるイメージを決定づけたように思われる。

では、その石崇が文学者としてはどうであったかというに、現存する作品が寡少なためもあり、鮮明であるとは言えない。[1] この間の事情は、話を楽府文学史に限っても同様で、北宋の郭茂倩の編に成る楽府作品の総集『楽府詩集』にも、石崇の名を冠したものとしては、相和歌辞の吟歎曲（巻二九）に属する「大雅吟」「王明君」「楚妃歎」三首と琴曲歌辞（巻五八）に属する「思帰引」の四篇が採られているに過ぎない。ただ、その吟歎曲三首については、『楽府詩集』巻二九吟歎曲の解題に「古今楽録」が引かれて、次のように述べられている。[2]

「古今楽録」に曰く、張永「元嘉技録」に吟歎四曲有り。一に曰く「大雅吟」、二に曰く「王明君」、三に曰く「楚妃歎」、四に曰く「王子喬」。「大雅吟」「王明君」「楚妃歎」は、竝びに石崇の辭なり。「王子喬」は、古辭なり。

ここからは、石崇の楽府作品が吟歎曲に集中しているということばかりではなく、張永（四一〇—四七五）「元嘉正声技録」の時には吟歎四曲の中の三曲は、既に石崇のものが最も旧いものになっていたことが知られる。それは取りも直さず、少なくともこの方面の曲辞については、その後の詩人にとって石崇楽府が一つの基準となっていたことを意

味している。

また、この〈吟歎三曲〉はそれぞれの曲辞の後に、「晋楽の奏する所なり」と記され、当時において演奏歌唱されていたことが知られる上に、『楽府詩集』に収載されている楽府歌辞で、〈吟歎三曲〉と同様に、晋の宮廷において演奏されたことが記される相和歌辞五十三曲中の、実に九割近くを古辞と魏の三帝の作品が占めること[3]、さらに、西晋に属する作者が石崇だけであることを見れば、石崇の〈吟歎三曲〉は当時に稀有な例外であったことも明らかである。

これらのことは、〈吟歎三曲〉が当時においても重要視されたであろうことを示唆するものであり、以てその等閑視すべきでないことが知られるのである。

本稿では、石崇の楽府詩〈吟歎三曲〉を取り上げ、特にその〈史〉的性格を示すと思われる表現について、その背景も含め、若干の考察を加えてみることにしたい。

一　石崇の楽府作品

（1）「楚妃歎」

1蕩蕩大楚　跨土萬里　蕩蕩たる大楚　土を跨ぐこと萬里
北據方城　南接交趾　北は方城に據り　南は交趾に接す
西撫巴漢　東被海涘　西は巴漢を撫し　東は海涘を被う
五侯九伯　是疆是理　五侯九伯　是れ疆り是れ理つ
矯矯莊王　淵渟岳峙　矯矯たる莊王　淵渟し岳峙す
11冕旒垂精　充纊塞耳　冕旒は精を垂れ　充纊は耳を塞ぐ
韜光戢曜　潛默恭己　光を韜み曜を戢め　潛默して己を恭しむ
内委樊姬　外任孫子　内は樊姫に委ね　外は孫子に任ず
猗猗樊姬　體道履信　猗猗たる樊姫　道を體し信を履む
既紲虞丘　九女是進　既に虞丘を紲け　九女　是れ進む
21杜絶邪佞　廣啓令胤　邪佞を杜絶し　廣く令胤を啓く
割歡抑寵　居之不吝　歡を割き寵を抑え　之に居りて吝ならず
不吝實難　可謂知幾　吝ならざるは實に難し　幾を知ると謂うべし
化自近始　著於閨闈　化は近き自り始め　閨闈に著わる
光佐霸業　邁德揚威　霸業を光佐し　德を邁い威を揚ぐ
31羣后列辟　式瞻洪規　羣后列辟　洪いなる規を式瞻す
譬彼江海　百川咸歸　譬れば彼の江海に　百川咸な歸すがごとし
萬邦作歌　身沒名飛　萬邦歌を作り　身は沒するも名は飛ぶ

（楽府詩集巻二九　相和歌辞四　吟歎曲）

「楚妃歎」は、楚国が如何に広大な領土を保有したかを四方

の極みを記すところから始まる。そして、その繁栄が如何に築かれたのかを、国力充実に寄与した人物の功績を称えることで歌い上げてゆく。言詞を尽くして称揚される人物がほかならぬ楚妃の樊姫である。

樊姫は十五句目から登場し、その貢献として、佞臣の虞丘を荘王から遠ざけたこと（十九、二一）、荘王の寵愛を独占することなく、優秀な女性を王に薦めたこと（二十、二二）、の二点が詠み込まれている。特に、我欲を抑えて周囲の優秀な女性を薦めた点については、二三句からの四句に「歓を割き寵を抑え　之に居りて吝ならず　吝ならざるは実に難し　幾を知ると謂うべし」と、詠み手の評価が交えられており、この点が特に強調され、より高く称えられていると言えるであろう。そしてかくあればこそ、末句において、樊姫の身は没してもその名は不朽に歌い継がれることとなった、と結ばれることになるのである。

「楚妃歎」の下敷きになった本事としては、『韓詩外伝』と劉向『列女伝』とに載せられる「楚妃樊姫」の記事が考えられるが、二十句目の「九女　是れ進む」という表現からは、「楚妃歎」が直接に基づいたのは、劉向『列女伝』ではないかと考えられる。当該箇所を掲げてみよう。[4]

（樊）姫曰く、「妾　王に於て、湯沐を尚り、巾櫛を執り、衽席を振るを得ること、十有一年なり。然るに妾未だ嘗て人をして梁鄭の間に之き、美人を求めて之を王に進め遣めずんばあらず。妾と列を同じうする者十人、妾より賢なる者二人なり。妾　豈に王の寵を擅にするを欲せざらんや」（傍線引用者）〔韓詩外伝巻二〕

（樊姫）對えて曰く、「妾　巾櫛を執ること、十一年。人をして鄭衛に之き、賢人を求め、王に進め遣む。今　妾より賢なる者二人、列を同じうする者七人なり。妾　豈に王の愛寵を擅にするを欲せざらんや」（傍線引用者）〔列女伝巻二　「楚荘樊姫」〕

このように、『韓詩外伝』の記述に従えば、樊姫によって薦められた女性は十二名でなければならない。ただ、この点は単なる文字の異同に過ぎないとも考えられ、これ以上の穿鑿は慎みたい。しかし一方、故事の継承という点から考えるならば、先行する書物、特に幾つかの『列女伝』を下敷きにして、楽府に仕立て直すという行為は、石崇より一世代前の傅玄（二一七―二七八）が既に「秦女休行」（『楽府詩集』巻六一）や「秋胡行」（同巻三六）で試みたものであり、[5]この時期の楽府制作の一手法としてあったことは指摘できるように思われる。実際、二七、二八句目の「化は近き自り始め　閨閤に著わる」という二句は、『漢書』の楚元王伝に劉向が『列女伝』を編述した経緯が記されていて、その中に「（劉）向　以為らく　王教は内由り外に及び、近

き自り始む[6]」とある表現を踏まえたものであろう。いったい、魏晋時期は劉向『列女伝』の広汎な影響の下、女性に関わる伝記が史伝の一つとして成り立った時期に当たり、[7]このような傾向が楽府詩制作の場にも影響を与えたのではなかろうか。

『隋書』経籍志（史部雑伝類）には、劉向『列女伝』を筆頭に、列女伝に関わりを有すると思われる著作が十三種著録されている。

列女傳十五卷（劉向撰、曹大家注）、列女傳七卷（趙母注）、列女傳八卷（高氏撰）、列女傳頌一卷（劉歆撰）、列女傳頌一卷（曹植撰）、列女傳讚一卷（繆襲撰）、列女後傳十卷（項原撰）、列女傳六卷（皇甫謐撰）、列女傳七卷（綦毋邃撰）、列女傳要錄三卷、女記十卷（杜預撰）、美婦人傳六卷、妬記二卷（虞通之撰）（傍線引用者）

曹大家班昭や西晋の趙母といった女性の手に成る注釈のほか、曹植・繆襲・皇甫謐・杜預といった魏晋期に活躍した詩人文人の頌・讃・伝などが列ぶ。このうち、魏の曹植・繆襲が楽府作家としても当時一流であったことは、楽府がしばしば女性を主人公にして詠ずることがあることと合わせ考えると、注目に値することであるように思われる。

曹植は、楽府歌辞「精微篇」（宋書楽志四）において、主として劉向『列女伝』に拠りながら、歴代の勇敢なる女性を描いている。「精微篇」には全てで七事が詠み込まれているが、その内の二つの事件、つまり、二人の孝女、緹縈と女娟の故事のみでこの「精微篇」の分量の過半を占めており、この点からこの二事が本篇の中で重要な位置を占めていることは疑いないと判断されるが、そのいずれもが劉向『列女伝』に収載されている物語であるということは、特にここで指摘しておきたいと思う。[8]一方、繆襲は、「皇覽」や「魏史」を修撰したことがあり、魏の鼓吹曲辞を制したことでも知られる人物である。[9]

このような人士たちが『列女伝』について強い興味を覚えていたこと、そしてまた楽府文学というジャンル自体に、女性を正面から捉えようとする傾きがあることとに、筆者は注意を払っておきたいと思う。すなわち、「列女伝」はこの時期の楽府文学にとって看過できない故事来源の重要な資料の一つであったのではないかと思われるのである。

因みに、先に触れた傅玄の「秋胡行」と「秦女休行」とは、それぞれ劉向『列女伝』と皇甫謐「列女伝」とに記載されている故事に拠ったと思われるものであった。[10]このほか、『列女伝』の記述に基づきつつ、それを詩歌に改めて詠ずることが少なからずあったであろうことを想像させるこの時期の作品としては、成公綏の次の詩を挙げることがで

きる。

晉成公綏詩曰
1天地不獨立
造化由陰陽
乾坤垂覆載
日月耀重光
5治國先家道
立教起閨房
二妃濟有虞
三母隆周王
塗山興大禹
10有莘佐成湯
齊晉霸諸侯
皆賴姬與姜
關雎思賢妃
此言安可忘

〔芸文類聚巻十五　后妃部　后妃〕

晉の成公綏の詩に曰く、
天地は獨立せず
造化は陰陽に由る
乾坤　覆載を垂れ
日月　重光に耀やく
國を治むるは家道を先にし
教えを立つるは閨房より起す
二妃は有虞を濟い
三母は周王を隆らしむ
塗山は大禹を興し
有莘は成湯を佐く
齊晉　諸侯に霸たるは
皆姫と姜とに賴む
關雎は賢妃を思う
此の言安んぞ忘るべけんや

堯の二人の娘が再三に渡って舜の危難を救ったことや、太姜・太任・太姒の三人の王母が周室に隆盛をもたらしたことを各々一句で以て示しつつ、国の興隆には女性の力が不可欠であることを詠じている。詩に詠み込まれているこれらの人名はすべて劉向『列女伝』中に見られるものであり、七句目「二妃濟有虞」は「有虞二妃」、八句目「三母隆周王」は「周室三母」といった具合に、『列女伝』の小題をすぐさま想起させるような形となっている。

これらの故事が一句（あるいは二句）を以て表現されていることは、これらに関わる故事が周知のものとして受容されていたことをまずは意味していると思われるが、更に、『晉書』の成公綏伝に、「嘯賦」が制された機縁が記されていて[11]、成公綏が非常に音楽に長けていたことと考え合わせるならば、この詩が『列女伝』故事が周知されていることを背景として、歌誦されるものであった可能性をも示唆しよう。すなわち、筆者は、同じこの詩が馮惟訥『古詩紀』の引く「周詩逸軌」に「賢明誦」と呼称されていることを故なしとはしないのである。

「楚妃歎」は、往昔の樊姫の淑徳を詠じた歌辞であるが、その背景には、劉向『列女伝』を核とした、女性主人公たちのことを描いた故事群が母体としてあったことが考えられる。『列女伝』を下敷きにして、石崇がこのような楽府詩を詠じたことは、傅玄の流れを汲むものであると位置づけることができるとともに、この頃女性に関わる伝記が既に一つの潮流を形成して各方面に影響を及ぼしていたことを裏付けるものである。石崇が『烈女伝』に基づいて「楚妃歎」を詠じたという点については、石崇自身が「楚妃歎」に

附した序によっても窺い知ることができるように思われる。

「歌録」に曰く、石崇の「楚妃歎」の歌辭に曰く、「楚妃歎」は其の由る所を知る莫し。楚の賢妃の能く德を立て勳を著し、名を後に垂るは、唯だ樊姫のみ。故に歎詠の聲をして永世絶えざら令む。疑らくは必ず爾らん。

〔文選巻十八　嵇康「琴賦」李善注引〕[12]

歌辭「楚妃歎」について、その由来は分からないが、楚国の賢妃で「德を立て勳を著し」て後世にまで声名を流したのは樊姫だけである、とある。石崇は楽府題をこのように解して歌辭を制したわけである。[13] これをいま、潘岳「笙賦」[14]に見られる理解と比べてみよう。

子喬は輕く舉がり、明君は歸るを懷う。
荆王は喟きて其れ長吟し、楚妃は歎きて悲しみを增す。

（傍線引用者）　〔文選巻十八　潘岳「笙賦」〕

「楚妃は歎きて悲しみを増す」という理解は、劉向『列女伝』の記述と合致するものではなく、「楚妃歎」に対する解釈が二系統あったことが知られる。このような潘岳の理解と比較したとき、石崇が『列女伝』系統の、樊姫を讃歎する故事を縁として、右に掲げた序のように断を下し、歌辭「楚妃歎」を制したことが明らかになるように思われる。

西晋期が擬古楽府制作とともに古曲解題を盛んに行った時期に当たることは既に指摘されている[15]が、石崇の「楚妃歎」の場合、そうした解題の根拠の一つが劉向『列女伝』にあったであろうことは疑いを容れまい。

続いて「王明君」を検討することとする。なお、ここの石崇の「楚妃歎」と次の「王明君」で詠じられているそれぞれの故事が、石崇の頃までに既に一組のものとして捉えられていたことは、嵇康「琴賦」（『文選』巻十八）に「王昭楚妃」と、一句中に併称されていることから知ることができる。

（2）「王明君」

1 我本漢家子　我は本漢家の子なるに
將適單于庭　將に單于が庭に適かんとす
辭訣未及終　辭訣未だ終るに及ばざるに
前驅已抗旌　前驅は已に旌を抗ぐ
5 僕御涕流離　僕御は涕流離たり
轅馬悲且鳴　轅馬は悲しみ且つ鳴く
哀鬱傷五内　哀鬱は五内を傷ましめ
泣淚濕朱纓　泣淚は朱纓を濕す
行行日已遠　行き行きて日已に遠く
10 遂造匈奴城　遂に匈奴の城に造る
延我於穹廬　我を穹廬に延き

加我閼氏名　我に閼氏の名を加う
殊類非所安　殊類は安んずる所に非ず
雖貴非所榮　貴しと雖も榮とする所に非ず
15父子見陵辱　父子に陵辱せられ
對之慙且驚　之に對して慙じ且つ驚く
殺身良不易　身を殺すは良に易からず
默默以苟生　默默として以て苟に生く
苟生亦何聊　苟に生くるに亦た何をか聊しまん
20積思常憒盈　積思は常に憒盈す
願假飛鴻翼　願くば飛鴻の翼を假り
乘之以遐征　之に乘りて以て遐くに征かん
飛鴻不我顧　飛鴻　我を顧みず
佇立以屏營　佇立して以て屏營す
25昔爲匣中玉　昔は匣中の玉爲り
今爲糞上英　今は糞上の英爲り
朝華不足歡　朝華は歡ぶに足らず
甘與秋草并　甘んじて秋草と并せられん
傳語後世人　語を後世の人に傳えよ
30遠嫁難爲情　遠嫁は情を爲し難しと

〔文選巻二七　楽府上「王明君詞」〕

「楚妃歎」が三人称による叙述であったのに比して、この「王明君」は一人称「我」によって歌い上げられている。自らの事として歌うことで、より切実に聴く者に訴えかけることに成功しているように思われる。これは『文選』に採られている一篇でもあり、おそらくこの「王明君」あたりの作品が、鍾嶸『詩品』に「英篇」と呼ばれたところのものであろう。[16]

「王明君」は、王昭君の故事を詠じたものである。石崇自身が附した序によれば、この楽府を「王明君」と題するのは、「昭」字が文帝の諱を避けたためである。[17] 王昭君故事といえば、画工に賄を贈らなかったために美しく描かれず、結果、漢と匈奴との政略結婚の道具となって、異境の地に興入れをしなくてはならなくなった、という筋によってよく知られる。しかし、石崇「王明君」には画工の故事は見えない。そもそもこの画工の故事は、現存する最も旧い資料である『漢書』匈奴伝と、史書としてそれに続く『後漢書』南匈奴伝には記されず、『世説新語』賢媛篇や『西京雑記』に至って初めて現れてくるものなのである。この故事継承の点については、蕭滌非氏の『漢魏六朝楽府文学史』に詳しい。[18] 蕭氏は、後漢蔡邕の「琴操」に、王昭君が自ら望んで胡夷の地へと赴いた旨が載せられていることも併せ考えると、班固の時にも既に異聞が存在していた可能性のあったことを指摘されている。そうすると、石崇が「王明君」を制する際にも、異聞に基づき、現存の作品と異なったもの

に仕立てあげることもあり得たはずである。ではなぜ石崇は『漢書』の記述に素直に従ったのであろうか。

この点に関し些かの卑見を加えるならば、「王明君」が歌辞として存在していた可能性のあることが、この問題と関わりがあるように思われる。

小論冒頭にも触れたように、『楽府詩集』の、「大雅吟」「楚妃歎」「王明君」それぞれの曲辞の後に附された「右一曲、晋楽の奏する所なり」という記述によれば、「王明君」も含めた〈吟歎三曲〉は、晋の宮廷において演奏に掛けられたものであったのである。そのため、石崇が「王明君」を制作した際にも、宮廷で管弦に被せられることに配慮して、あるいは聴衆の興味を惹くであろう異聞よりも、史書に載せられている最も基本的で聴衆にとっても受け容れやすい故事に基づいて詠じ、むしろ情を抒べることの方に重きを置こうとしたのではないか。そのように考えるならば、「王明君」が一人称「我」という代名詞を用いて物語を進行させていることも理解しやすいように思われる。このような演奏歌唱されるということから生じる制約は、一方において、歌辞化の限界を示すものであるかも知れない。

歌唱されたものであったということについては、末尾に現れる表現からも看て取ることができるように思われる。

――語を後世の人に伝えよ　遠嫁するは情を為し難しと結びに現れるこの表現は、王昭君自身の言葉のようにも、歌い手が教訓を附加したもののようにも思われるが、少なくとも、一人称を用いているところからは、飽くまでも吾が身のこととして、昭君の心情に寄り添った形で歌い上げられているといえよう。いまこれを、魏晋期の傅玄の「秋胡行」（『楽府詩集』巻三六）末尾の表現と比較してみよう。

婚を結んで三日、遠国へ赴任した夫が数年を経て帰郷し、路傍の婦人に誘いを掛けて拒絶される。家に帰ってみれば、その婦人こそ吾が妻であったことが判明する。妻は不貞の夫を痛罵した揚げ句に河に身を投げる――『列女伝』（巻五「魯秋潔婦」）を下敷きにしたと思われる、傅玄「秋胡行」は次のように結ばれている。

彼の夫は既に淑ならず　此の婦も亦た太はだ剛なり[19]

「此の婦も亦た太はだ剛なり」という結びは、些か批評めいた口振りとでもいうべきものであり、語り手と語られる秋胡の妻との間には、その感情において距離が有るように感じられる。先ほど「楚妃歎」について触れた際に言及した『列女伝』との関わりで言えば、本事に対する立ち向かい方は大いに異なるとせねばならない。

確かに、楽府の体裁を用いている以上、歌辞たらしめんと制作したであろうことが予想されるが、それにしてもやはり主人公の心情に沿うことを放擲した感のある、傅玄「秋

胡行」の末尾は、「王明君」の結びの表現とは趣を異にするものである。この「秋胡行」は少なくとも公的な場において管弦に掛けられることはなかったと考えられるものであるが[20]、実際、末尾を見る限りにおいても、「王明君」ほど演奏され歌唱されるのに相応しいようには感じられない。

「王明君」と「楚妃歎」とは、共に史書や伝記に基づいて作られたと考えられるものであった。また、これらは、往昔の一人物に焦点を当てて詠じた楽府で、演奏歌唱されたことが確認できるものとして、ほとんど類を見ないものでもあった。

次に「大雅吟」を掲げる。この「大雅吟」は、前掲の二首とは些か趣を異にしている。

（3）「大雅吟」

1 堂堂太祖　淵弘其量　堂堂たる太祖　淵弘其れ量る
仁格宇宙　義風遐暢　仁は宇宙に格り　義風遐かに暢る
啓土萬里　志在翼亮　土を啓くこと萬里　志は翼亮に在り
三分有二　周文是尚　三分して二を有つ　周文是れ尚ぶ
於穆武王　奕世戢聰　ああ穆たる武王　奕世聰を戢す
11 欽明沖默　文思允恭　欽明沖默として　文思允に恭たり
武則不猛　化則時雍　武は則ち猛ならず　化は則ち時雍あり
庭有儀鳳　郊有遊龍　庭に儀鳳有り　郊に遊龍有り
啓路千里　萬國率從　路を啓くこと千里　萬國率從す
蕩清吳會　六合乃同　吳會を蕩清し　六合乃ち同じうす
21 百姓仰德　良史書功　百姓德を仰ぎ　良史功を書す
超越三代　唐虞比蹤　三代を超越し　唐虞　蹤を比ぶ

（傍線引用者）（楽府詩集巻二九　相和歌辞四　吟歎曲）

周文と武王という人物の名や天下の三分の二を有した事跡などが詠じ込まれていることに鑑みれば、「大雅吟」という作品は、その名（『毛詩』大雅の諸篇には周王朝建国の故事が詠われている）が示す通り、周室の事績を称え詠じたものであると解することができるであろう。初句の「太祖」についても、『毛詩』大雅「生民」篇の正義に「文王を太祖と為す」と見えている。

また、先行する詩歌の中、『楽府詩集』において同じく相和歌辞に分類されている曹操「短歌行」の冒頭部分にも、周文王の事績が詠じられており、そこには「大雅吟」と同様、周室の徳を慕って天下の三分の二が帰した、という表現が見えている。

周西伯昌　懐此聖德　周西伯昌　此の聖德を懐う

参分天下　而有其二　天下を参分し　而して其の二を有つ
修奉貢獻　臣節不墜　修奉貢獻し　臣節墜ちず
崇侯譏之　是以拘縶　崇侯之を譏し　是を以て拘縶せらる

（一解）〔宋書　楽志三〕

このほか、曹植にも「文王贊」「周武王贊」と題する四言斉句の作品が遺っており、「三分して二を有つも、猶お復た商に事う」（「文王贊」）とか、「且つ商の臣と作る」（「周武王贊」）という詩句が並らべられており[21]、これらは文王・武王について詠じる際の常套表現であったことが窺い知られる。一句目の「太祖」を含め、七、八句目に見られる〝文〟から〝武〟への継承等、「大雅吟」に詠じられている多くの事柄が晋王朝においてもよく当て嵌まることを、当時の人士たちが意識しなかったとは思われないが、「大雅吟」は、周室の文王・武王を頌える詩歌の系譜にひとまずは位置づけることができよう。

さて、「大雅吟」中に見られる、頌徳の表現を少し仔細に見てみると、「大雅吟」には、従前の楽府作品には見られない特徴的な表現が用いられていることに気がつく。それは詩の掉尾に現れる表現である。

百姓徳を仰ぎ　良史功を書す
三代を超越し　唐虞　蹤を比ぶ

最末尾両句の、頌徳するのに神代の君主に比する表現は、曹植「責躬」詩に見える「商を超え周を越え　唐と蹤を比ぶ」という両句を襲ったものであると思われる。

1 於穆顯考　時惟武皇　ああ穆たる顯考　時れ惟れ武皇
受命于天　寧濟四方　命を天に受け　四方を寧濟す
朱旗所拂　九土披攘　朱旗拂う所　九土　披攘す
玄化滂流　荒服來王　玄化滂く流れ　荒服來王す
超商越周　與唐比蹤　商を超え周を越え　唐と蹤を比ぶ
11 篤生我皇　奕世載聰　篤く我が皇を生み　奕世聰を載す
武則肅烈　文則時雍　武は則ち肅烈　文は則ち時雍
受禪于漢　君臨萬邦　禪を漢に受け　萬邦に君臨す
萬邦既化　率由舊則　萬邦既に化し　舊則に率由す
廣命懿親　以藩王國　廣く懿親に命じて　以て王國に藩とす（傍線引用者）

〔文選巻二十　曹植「責躬詩」〕

この「責躬詩」の冒頭部分には、頌徳の対象に呼び掛ける詠い出しや「文」「武」字を配することなどが見え、石崇「大雅吟」が「超越三代」云々の二句に限らず、非常に多く曹植「責躬詩」の詩句を襲っているものであることが看取される。

しかし、二二句目の、「良史功を書す」という史的営為の表現は、曹植作品にも見られないものであり、管見の限り

では、史的営為を詠み込んだ、この時期までの楽府詩において極めて罕見の詩句として注目される。

この句に、若干類似するかと思われる表現は、魏の繆襲の手に成る楽府鼓吹曲辞中に見える。

應帝期　　帝期に應ず
於昭我文皇　　ああ昭かなる我が文皇
……
考圖定篇籍　　圖を考え篇籍を定め
功配上古羲皇　　功は上古の羲皇に配す
〔宋書　楽志四「応帝期」〕

しかし、これとても文帝の功業を神世の聖人に比する形で述べられたものであり、図籍を定めたのは君主自身なのであるから、[22]石崇「大雅吟」の「良史功を書す」という、史的営為にかかる表現と同様であるとは解し得ないものである。為政者の徳を頌えるもので、「良史功を書す」に類似する詩歌は、石崇に先駆けては見出し難いが、ほぼ時代を同じくして詠じられたものとして、一首閻纘の詩を挙げることができる。

石崇にやや先んじて魏晋期を生きた人物に、「風土記」の著者、周處がいる。『晋書』の本伝に見られる記述によれば、周處の生き死にのさまは、当時の人士に少なからざる感銘を与えたらしく、潘岳と閻纘の両名が周處の死を悼み、かつその名の永かるべきを念じて詩を詠じたが、その閻纘の奏した詩中に、〝良史〟の語が見えている。[23]

（周）處は「默語」三十篇及び「風土記」を著し、并びに「呉書」を撰集す。時に潘岳詔を奉り「關中詩」を作りて曰く、「周は師令に徇じ　身は齊が斧に膏さす
人の云に亡ぶも　貞節は克く擧げらる」と。又た西戎校尉閻纘亦た詩を上りて云う、「周其の節を全うし　令問して已まず　身は云に沒すと雖も　名は良史に書せらる」と。（傍線引用者）

「身雖云沒　書名良史」――身の亡ぶは一代のこと、名の挙げらるるは永代のことである。閻纘詩のこの表現は、潘岳「関中詩」に「人の云に亡ぶも　貞節は克く挙げらる」とあるものと、その底に流れるのは同様のものであると思われるが、閻纘詩においては――「大雅吟」同様――史書に記されることによって名は不朽のものになるという姿勢が鮮明に表現されている。

周處が勇ましく戦場に没したのは元康七（二九七）年である。潘岳・閻纘の詩もまたその死からそれほど時を経ずして制られたと考えてよかろう。[24]

それまで明確には詠まれることの無かった〈史〉に関わる営為が、石崇と閻纘という、時代を相近くする詩人たちの作品中に見出されることに想いを致すとき、「大雅吟」の

「良史功を書す」という句が示す〈史〉的性格には、石崇個人のみの特異性に依らない、当時の文壇の情況というものが、幾らか作用しているであろうことは否定できないように思われる。

「楚妃歎」「王明君」などに見られた、往昔の人物について、史伝に基づきつつ改めて楽府の歌辞として制し直す行為や、「大雅吟」中の「良史功を書す」という〈史〉に関わる営為を詠み込んでいることなどは、そのひとつひとつは些細なことであるにしても、これらは紛れもなく、文史、すなわち文学と史学の交流を反映したものであると考える。では一体、これらの営みはどのような背景より生まれ出てきたのであろうか。

以下章を改めて、石崇自身の資質、また彼の置かれていた情況等からこの問題について若干の検討を加えることとしたい。

二　石崇の個人的背景

筆者は以前、魏晋期の文人傅玄の、史伝に記された過去の出来事や人物を楽府歌辞に詠じ変えた作品を取り上げて論じたことがある。[25] 傅玄の場合、彼の史官としての経歴と、雅俗両楽に通じていたことなどを考え合わせるなら、このような楽府の由って来るところは分明なようにも思われるが、石崇の場合については、史官としての経歴は資料的に確認できないようである。しかし、彼の遺した文章からは、事を叙すということに対する彼の並々ならぬ意欲を看て取ることができるのである。例えば、「奴券」なる文章は、ある日出掛けた先で、奴隷を買い取ることになったことを写し描いたものである。[26]

石崇「奴券」に曰く、余　元康の際、至りて滎陽の東に在りて住むに、主人公の言聲大はだ高きを聞く。須臾にして出でて吾が車に趣りて、曰く、「公府　當に吾が家の嘵嘵たるを怪しむべきや。中に一惡羝奴を買い得たり、宜勤と名づく。身長九尺餘り、力は五千斤を擧げ、五石の力弓を挽き、百歩して錢の孔を射す。書を讀むと言い、使わんと欲すれば便ち病み、日び三斗の米を食らい、奈何ともする能わず」と。…

（太平御覧巻五九八　文部十四　契券）

いま冒頭部分を掲げたが、ここからも日常の一風変わった出来事に対して詳細に貪欲に記し置こうとする姿勢が見られるように思う。

さらにまた、石崇には、先に触れた「楚妃歎序」や「王明君詞序」を含め、盛んに詩歌に序（叙）を附したことも認められる。例えば、「金谷詩叙」は、洛陽の郊外金谷澗に

構えた別荘のようすと、そこに自身が領袖となって、繁く文士たちを招き文宴を張った〝金谷の集い〟の模様を事細かに描いたものであり[27]、この叙の存在自体が、石崇の叙事への執着を傍証しているように思われるが、その中に次のようなことばが見えている。

性命の永からざるに感じ、凋落の期無きを懼る。故に具さに時人の官號・姓名・年紀を列ね、又た詩を寫し後に箸く。後の事を好む者、其れ之を覽んかな。

「金谷詩叙」における細やかな記述に対する、記録者石崇の想いとは、永からざる生命に対する感慨や期無き衰亡に対する懼れであったのである。

これらの例からは、石崇の個人的資質においても、叙事に少なからざる関心を抱いていたことを知ることができるように思われるのである。

三　当時の情況――賈謐集団と〝文史〟

石崇が活躍した西晋時期の、文学的社会的特徴の一つとして、文人集団が頻繁に形成されたことがしばしば論及される[28]。石崇もその例に洩れることなく、自らが領袖であった「金谷の集い」も含め、二つの文学集団に属していたことが知られている。換言すれば、石崇はこの時期の文士集団潮流の体現者の一人であったといえよう。本章では、所謂「賈謐の二十四友」――賈謐の幕下に形成された文士集団の、特に文史両面に亘って活躍をした人物数名の営為を検討し、当時の文学的社会的情況について、少しく素描しておくこととしたい。そうすることで、賈謐の集団、引いてはこの時期の〝文史〟に対する営みが、既にある流れを成していたことを窺い知ることができるのではないかと考えるからである。

賈后の権勢を嵩に栄華を極めた賈謐の元には有象無象、あらゆる類の人間が蝟集した。その中に文章で以て賈謐を賛美した二十四名の人士がおり、号して二十四友といったという。この二十四友には、筆頭に石崇が挙げられているほか、潘岳や陸氏兄弟など当世一流であった詩人たちの名が並んでいる[29]。純粋に文学的というよりも、政治的色彩の濃い集団であったという指摘[30]がなされているが、この賈謐集団が当時にあって、文学も含めた多方面において大きな発言力を保持していたであろうことは疑いを容れまい。例えば、賈謐が大いに発言力を振るった国家案件の一つに、晋の国史である晋書を何時から起筆すべきであるかについての議論、所謂「晋書限断議」がある。

『晋書』（巻四十）賈謐伝によれば、晋書を何時をもって起年するかについての議論は、賈謐が国史を司る立場にな

る前、武帝の代から既にあったが、定論を見ず沙汰止みになっていた。それが恵帝即位後、改めて諮られることになり、賈謐の「泰始」（二六五年）説が、騎都尉濟北侯荀熙らの「正始」（二四〇年）説と博士荀熙らの「嘉平」（二四九年）説とを抑えて採用されることになった、という。この議論において賈謐のブレインとなったことが知られるのが、陸機と潘岳である。

陸機は、一流の詩人としての盛名とともに、歴史書「晋紀」を著した史学者としての顔も持ち合わせている。晋書限断に関するものとして、「晋書限断議」と題する文章のおそらく断片と思われるものが伝えられており、[31] また、楽府作家としての陸機には、「婕妤怨」という、漢代の班婕妤が成帝の寵愛を失ったことを詠じた、史伝に基づいて制作されたと思われる楽府作品がある。[32]

潘岳は、世に知られる「悼亡詩三首」のほか、多くの哀辞をも制し、後世劉勰に「叙事伝の如し」と評された。[33] 彼も賈謐に媚び諂った人士の一人であり、また、晋書限断の論争にも一枚咬んでいたことが『晋書』の本伝に見えている。[34] 賈謐に代わって制したという「晋書限断」は現存しないが、賈謐の名を冠して奏される文を潘岳が記したということは、賈謐を充分に満足させるだけの内容を具備したものでなければならないことを意味しており、先行する史書に対して成されたであろう講究が想像される。

あるいは、そういった成果とも関わりがあるのであろうか、潘岳に「賈謐の坐において漢書を講ず」と題する詩が遺っていて、次のような句が見られる。

前疑惟辨　舊史惟新　前疑惟れ辨じ　舊史惟れ新なり
惟新爾史　既辨爾疑　惟れ爾が史を新にし　既に爾が疑を辨ず

〔芸文類聚巻五五　雑文部一　談講〕

題の示す通り、史書が詩に詠み込まれており、また「既に爾が疑を辨ず」の一句からはその場において議論がなされたことも窺い知られる。これは単にその場の要諸に従った結果だとも考えられるが、巨視的に見た場合、詩文をものする人物に史書を講じさせる場が設けられることそれ自体、当時にあって文学と史学、すなわち文史の交流が、おそらく時代の流れに沿うものであったことを示していよう。

陸機と潘岳、西晋詩壇の双璧ともいうべき両詩人は、賈謐の座に在って、反目しあいながら、詩才を競っていたのであり、[35] その、競うべき詩才文才に〈史〉的材料は欠かせなかったことが推測される。

さてここに、潘陸と同様、あるいはそれ以上に、〝文史〟の交流に心を砕いた人物がいる。後世「千古の絶唱」（『古

詩源』巻七）と称されることになる「詠史」八首を詠んだ、左思である。『晋書』本伝に、左思が賈謐のために『漢書』を講じたとの記載があるので、前掲の潘岳「賈謐の坐において漢書を講ずる」詩に詠まれた場の主役は、あるいは左思であったかも知れない。

「三都賦」とともに左思の名を万古ならしめた「詠史」八首は、決して単に過去の歴史を詩に詠じ変えたものではなく、寒門人士左思の気概を濃厚に漂わせるものである。しかしまた、自らの矜持の表明に寄り添うところのものは、紛れもなく史書に対する信頼感である。こういった左思の文学営為に見られる、史書あるいは史学への傾倒は、彼の〈写実主義〉と深く関わるものであると思われる。左思の文学に向かう際における写実主義については、「三都の賦」の序に[36]、「物を美す者は其の本に依るを貴び、事を讃ずる者は宜しく其の実に本づくべし」と、彼の基本姿勢が述べられている。

リアリティを持たせるための基本姿勢は、実に依ることにあり、その方法はたとえば、「其の山川城邑ならば則ち之を地図に稽え、其の鳥獣草木ならば則ち之を方志に験す」こと、つまり、地図や方志を基本資料として用いることだという。左思は自己に先立って京都を賦した詩人たちを、地図や方志に基づく、そしてまた描写しようとする対象自体をありのままに描こうとする写実主義の手法を以て超克しようとしているのである。これはまさしく、文学と史学、すなわち文史の結合であるということができるのではないだろうか。管見の限りでは、こういった姿勢は、左思に至るまでは、僅かに後漢の班固や魏の孫該など史家の資質と経験を有する人物の詩賦において見られるものであった[37]。つまり、漢魏時期における〝文史〟は、箇々の事象に過ぎず、依然潮流たり得るものではなく、極言すれば、西晋に至り左思に至って、漸く文学士の手に文学と史学の結合が委ねられることとなったということができよう。

この「文学と史学の結合」という点については、『文選』李善注に引く南斉の臧榮緒「晋書」で左思について「少くして文史を博覧し、三都の賦を作らんと欲す[38]」と述べられていることと符合するものである。また、左思自身も〝文史〟を熟した語として認識していたことは、吾が娘たちを詠んだ「嬌女詩」の中に〝文史〟の用例が見られることで確認できる[39]。

以上、賈謐集団に関わりをもった西晋の代表的な詩人である陸機・潘岳・左思たちには、おそらくは「晋書限断議」という具体的な案件が推進器の役割を果たしたこともあり、文学と史学との両学に亘る積極的な営みが看取されたように思われる。その営みの中には、左思「嬌女詩」に端

無くも現れたように、〝文史〟という言葉もまた意識されていたのではないかと思う。このような営みは、賈謐集団の中のみならず、賈謐集団には与しなかった人士たちの営為中にも見出されるものなのである。例えば、夏侯湛は、多様な詩歌の制作のみならず、外祖母や姻戚関係にあった人物の別伝や、早逝した二人の大叔父の叙をも制している。[40]

この時代において、文史が結びつくに至った背景について、森三樹三郎氏は次のように指摘されている。[41]

それでは何が史学と文学とを結びつけるに至ったのであろうか。章学誠の言葉を借れば、『夫れ史の載する所の者は事なり。事は必ず文を藉りて伝う。故に良史は文に工みならざるはなし』というのが第一の理由となるであろう(文史通義史徳)。事を述べ、人を描くということは、勝義においてまた文学の業である。かような自覚が、六朝人に文史の語を作らせたのであろう。しかし、現実の問題としては、官制の組織がこれを助長したものとも見られる。魏晋以来、官制に多少の出入はあるにしても、中書・秘書の二省の官は、たとえ官秩は卑くとも、いわゆる甲族起家の官であり、名門の子弟の中でも特に文史の才に長じた者が任命されるのが例であった。――

これまでの考察を通して、西晋における〝文史〟交流の一端が幾らか窺えたと考える。そして、文人集団の体現者たる石崇はこのような流れにも人一倍敏感であったであろうことが想像される。彼の〈吟歎三曲〉に見られる〈史〉的性格は、第二章に見えた石崇自身の叙事への欲求と、本章で素描を試みた、当時の文史両学に亘る営みの潮流とによって形成され湧出したものであると考える。

結びに代えて

冒頭にも触れたように、数量から言えば、楽府文学という限られたジャンルにおいても、石崇の占める位置は決して大きいものではない。しかしまた、今に遺る楽府が〈吟歎曲〉に集中することや、それぞれに〈史〉的性格が見られることなど、ユニークな存在であることも否定できない。さらに、小論で取り上げた「楚妃歎」「王明君」「大雅吟」というこれら三首の歌辞は、『楽府詩集』に「晋楽の奏する所なり」と記されるのによれば、管絃に被せられ歌唱されていたものである。このことは、管絃に掛けられた曲辞の作者の内、西晋に属すのが石崇だけであることと合わせ考えると、当時の宮廷において演奏される歌辞の内容として、史伝に記された往昔の故事が好まれていたことを反映しているものであるように思われる。[42]

さて、文と史との関わりを考える際に想到されるのが、曹丕の「典論論文」中に見られる次の一節であろう。[43] 最後にその一節に触れて小論を結ぶこととしたい。ここにも〝良史〟の語が見えている。

蓋し文章は經國の大業にして、不朽の盛事なり。年壽は時有りて盡き、榮樂は其の身に止む。二者は必至の常期、未だ文章の窮まり無きに若かず。是を以て古の作者、身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見す。良史の辭に假らず、飛馳の勢に託さず、而も聲名は自ら後に傳わる。（傍線引用者）

曹丕はここで、文学者はすぐれた文章をものすることによって、史家のことばにも依らず、有力者の権勢にも頼ることなく声名を後世に伝えることができたのである、と文章の力による文学の自立を宣言している。

しかし、曹丕のことばとは逆行するように、石崇は「大雅吟」で往昔の人物を称えるに際して、史書に記されて不朽となった、と史伝に対する安易にさえ見える信頼感を表明している。この信頼感は石崇が置かれていた当時の情況によって醸し出されたものであろう。石崇の活躍した三世紀後半は、史書に対する意識が高まった時期であったこともあり、さらには官制の在り方にも促される格好で文と史とは急速に結びついていった。[44] 楽府文学も、こうした潮流の中で、史伝に記された往昔の出来事を積極的に取り込み、また、徳を頌える表現として史的な営為をも詠み込むようになっていったのだと思われる。

また、石崇個人について見れば、上掲した「金谷詩叙」にも表された、露と消えるはかなさへの拭い切れぬ懼れが、負の原動力として働いていたように思われる。

この力に衝き動かされた石崇の文学営為は、曹丕がいう詩文の質の高さによって名を後世に伝えることではなく、「奴券」においてある時の自らの経験を具述したように、あるいは「金谷詩叙」や「思帰引序」（『文選』巻四五）に金谷の別荘の有様を細叙したように、文章の素晴らしさよりはむしろ、ただひたすらに記し置くことによって自らが存在した証を立てるものであったように思われるのである。

この姿勢は、「楚妃歎」の「身は没するも名は飛ぶ」（三六句目）、「王明君」の「語を後世の人に伝えよ」（二九句目）、「大雅吟」の「良史功を書す」（二二句目）という、〈吟歎三曲〉それぞれの末尾近くにおいて現れる、名前や言葉や功績が後世に伝わることを肯定的に捉えたり強く念じたりする表現にも看て取ることができるものである。

賈謐という「飛馳の勢」に諂うことで乱世を生き抜こうとした石崇であったが、賈謐が誅殺されるに及んではその命運を永らえることは叶わなかった。

その後、石崇という名は、彼が望んだことであるかは知らず、もっぱら奢侈にまつわる物語の登場人物のものとして人々の記憶に刻まれることとなった。

注

(1) 逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』に収載されている石崇作品は十首である。

(2) 「古今樂録」曰、張永「元嘉技録」有吟歎四曲。一曰「大雅吟」、二曰「王明君」、三曰「楚妃歎」、四曰「王子喬」。「大雅吟」「王明君」「楚妃歎」、竝石崇辭。「王子喬」、古辭。…　〔楽府詩集巻二九　吟歎曲　解題〕

(3) その内訳を示せば、古辭十七首、楚辭鈔一首、曹操十四首、曹丕十首、曹叡五首、曹植三首、石崇三首となる。この点については既に、増田清秀氏が、魏晋の宮廷において演奏された楽府は、魏の三帝のものにほぼ限られていたことを指摘されている（『楽府の歴史的研究』第五章「魏晋の宮廷演奏の歌曲」一九七五年三月、創文社）。

(4) (樊)姬曰、「妾得於王、尚湯沐、執巾櫛、振衽席、十有一年矣。然妾未嘗不遣人之梁鄭之間、求美人而進之於王也。與妾同列者十人、賢於妾者二人。妾豈不欲擅王之寵哉…」　〔韓詩外伝巻二〕

(樊姬)對曰、「妾執巾櫛、十一年。遣人之鄭衛、求賢人、進于王。今賢于妾者二人、同列者七人。妾豈不欲擅王之愛寵乎…」　〔列女伝巻二「楚莊樊姬」〕

(5) 拙稿「傅玄の〈詠史楽府〉制作」（『集刊東洋学』第八二号、一九九九年十月）参照。

(6) 向睹俗彌奢淫、而趙衛之屬起微賤、踰禮制。向以爲王教由内及外、自近者始。故採取詩書所載賢妃貞婦、興國顯家可法則、及孽嬖亂亡者、序次爲列女傳、凡八篇、以戒天子。　〔漢書巻三六　楚元王伝〕（傍線引用者）

(7) この点については、下見隆雄氏の『劉向『列女伝』の研究』（序論篇・第一章・第三節「『列女伝』への知識人の関心」、一九八九年二月、東海大学出版会）を参照されたい。

(8) 『列女伝』巻六「斉太倉女」、巻六「趙津女娟」。

(9) 繆襲については、松家裕子「繆襲とその作品」（『アジア文化学科年報』、一九九八年十一月、追手門学院大学文学部）参照。

(10) 『列女伝』巻五「魯秋潔婦」、皇甫謐「列女伝」（『三国志』巻十八　魏書　龐淯伝　裴松之注引）

(11) 綏雅好音律、嘗當暑承風而嘯、泠然成曲、因爲嘯賦曰、（後略）。　〔晋書巻九二　文苑列伝　成公綏〕

(12) 「歌録」曰、石崇「楚妃歎」歌辭曰、「楚妃歎」莫知其所由。楚之賢妃能立德著勲、垂名於後、唯樊姬焉。故令歎詠聲永世不絶。疑必爾也。　〔文選巻十八　嵇康「琴賦」李善注引〕

(13) 李善注が引く「歌録」に、「吟歎四曲、王昭君・楚妃歎・楚王吟・王子喬、皆古辭」と見えており、これらが歌辭であることが知られる。

(14) 子喬輕舉、明君懷歸。荆王喟其長吟、楚妃歎而增悲。

（15）佐藤大志「崔豹『古今注』音楽篇について」（『岡村貞雄博士古稀記念中国学論集』所収、同刊行会編、一九九九年八月、白帝社）参照。

（16）『詩品』中品・晋侍中石崇「季倫・顔遠、並有英篇」。

（17）王明君者本是王昭君、以觸文帝諱改焉。…（文選巻二七）

（18）蕭滌非『漢魏六朝楽府文学史』第四編「晋楽府」第二章「晋之故事楽府」（一九八四年三月、人民文学出版社）。

（19）彼夫既不淑、此婦亦太剛。
（楽府詩集巻三六　相和歌辞十一）

（20）注（3）前掲増田氏論考参照。

（21）芸文類聚巻十二、帝王部二、「周文王」、「周武王」。

（22）この楽府に附せられている序には「言曹文帝以聖德受命、應運期也」と記されている。

（23）（周）處著「默語」三十篇及「風土記」、并撰集「呉書」。時潘岳奉詔作「關中詩」曰、「周徇師令　身膏齊斧　人之云亡　貞節克舉」又西戎校尉閻纘亦上詩云、「周全其節　令問不已　身雖云沒　書名良史」（傍線引用者）
（晋書巻五八　周處伝）

（24）陸侃如『中古文學繫年』（一九八五年六月、人民文学出版社）は、「關中詩」を元康九年に繫ける。

（25）拙稿「傅玄の〈詠史楽府〉制作」（『集刊東洋学』第八二号、一九九九年十月）参照。

（26）石崇「奴券」曰、余元康之際、至在滎陽東住、聞主人公言聲大高。須臾出趣吾車、曰、「公府當怪吾家嘵嘵邪。中買得一惡羝奴、名宜勤。身長九尺餘、力舉五千斤、挽五石力弓、百歩射錢孔。言讀書、欲使便病、日食三斗米、不能奈何」…
（太平御覽巻五九八　文部十四　契券）

（27）石崇「金谷詩叙」曰、…有別廬在河南縣界金谷澗中、或高或下、有清泉茂林、衆果竹柏藥草之屬、莫不畢備。又有水碓・魚池・土窟、其爲娛目歡心之物備矣。時征西大將軍祭酒王詡當還長安。…遂各賦詩、以叙中懷。或不能者、罰酒三斗。感性命之不永、懼凋落之無期。故具列時人官號・姓名・年紀、又寫詩箸後。後之好事者、其覽之哉。…（傍線引用者）
（世説新語　品藻篇　劉孝標注引）

（28）森野繁夫『六朝詩の研究』（一九七六年、第一学習社）、張仁青『魏晋南北朝文学思想史』（一九七八年、文史哲出版社）、佐藤利行『西晋文学研究』（一九九五年、白帝社）など。

（29）或著文章稱美謐、以方賈誼。渤海石崇歐陽建・滎陽潘岳・呉國陸機陸雲…齊國左思…、皆傅會於謐、號曰二十四友、其餘不得預焉。
（晋書巻四十　賈謐伝）

（30）張國星「關於『晋書・賈謐傳』中的〝二十四友〟」（『文史』第二七輯、一九八六年十二月）参照。張氏は、賈謐の二十四友は国史編纂の為に集められた集団であったとされる。

（31）初学記巻二一「史伝」、陸士衡「晋書限断議」。

（32）嫵妤去辭寵　淹留終不見　寄情在玉階　託意唯團扇…
（楽府詩集巻四三　相和歌辭十八　楚調曲下）
この作品は叙事よりはむしろ抒情を主とするものであると思われるが、「具体的な事柄を述べることにほとんど興味をもっていない」（高橋和巳「陸機の伝記とその文学」『高橋和

巳作品集9　中国文学論集』、一九七二年三月、河出書房新社、初出は『中国文学報』第十一・十二冊、一九五九・一九六〇年）と指摘される陸機であれば、この作品の存在は注目に値しよう。

(33) 及潘岳繼作、實踵其美。觀其慮善辭變、情洞悲苦、叙事如傳。　（文心雕龍　哀弔篇）

(34) 岳性輕躁、趨世利、與石崇等諂事賈謐、每候其出、與崇輒望塵而拜。…謐二十四友、岳爲其首。謐晉書限斷、亦岳之辭也。　（晉書巻五五　潘岳伝）

(35) 潘陸が賈謐の座に在って如何様であったかについては、高橋和巳「潘岳論」、「陸機の伝記とその文学」（ともに『高橋和巳作品集9　中国文学論集』［一九七二年三月、河出書房新社］所収、初出はそれぞれ『中国文学報』第七冊、一九五七年、『同』第十一・十二冊、一九五九・一九六〇年）を参照されたい。

(36) 余既思摹二京而賦三都、其山川城邑則稽之地圖、其鳥獸草木則驗之方志。…美物者貴依其本、讚事者宜本其實。匪本匪實、覽者奚信。…　（文選巻四　賦乙）

(37) 魏孫該「三公山下祠賦」、趙國元氏縣西界有六神祠、吾觀其一焉。…是時寓目永日、夕宿東序、召彼故老、訊之舊典。…其亂曰、…先人諒德、圖像垂形。考之舊史、典謨無聲。（傍線引用者）　（初学記巻十三　祭祀）

祠堂の偉容に見惚れること一日、日暮れてとった宿に当地の故老を召して謂われを訊ねた、とあり、賦を制作した情況を説明する中に旧典への問いかけが描かれている。孫該に史家としての経歴があったことは、『三国志』巻二一王衛二劉傅伝の裴注に引く「文章叙録」から確認できる。この序のような例で孫該より前のものとしては、後漢のやはり史家である班固の「西都賦」（『文選』巻一）の末尾に「若臣者、徒觀迹於舊墟、聞之乎故老」という言葉が見える。

(38) 臧榮緒晉書曰、左思、…少博覽文史、欲作三都賦。　（文選巻四　「三都賦序」李善注引）

(39) 上下弦柱際　文史輙卷襞　（玉台新詠巻二）

(40) 佐竹保子「死者たちへの哀歌と頌歌」――夏侯湛の「叙」と「伝」――（『語文と教育』第十号、一九九六年八月）参照。

魏晉時期の別伝については、逯耀東『魏晉史学及其他』「魏晉別伝的時代特性」（二〇〇〇年二月、東大図書公司）参照。

(41) 『六朝士大夫の精神』第I部第二章「玄儒文史」（一九八六年十月、同朋舎）。

(42) 石崇の〈吟歎三曲〉が民間出自とされる相和歌辞に含まれることに関連しては、金谷の別荘について記している、同じ石崇の「思帰引序」（『文選』巻四五）に、「家に素より技を習わしめ、頗る秦趙の聲有り」と見えているのが、その音楽的背景の一端を示していて参考になろう。

(43) 蓋文章經國之大業、不朽之盛事。年壽有時而盡、榮樂止乎其身。二者必至之常期、未若文章之無窮。是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍、不假良史之辭、不託飛馳之勢、而聲名自傳於後。　（文選巻五二　曹丕「典論論文」）

(44) 吉川忠夫『六朝精神史研究』（第IV部第十章、一九八四年二月、同朋舎出版）参照。